

福岡市埋蔵文化財調査報告書第346集

HA NE DO
羽根戸古墳群(3)

—B群4号墳調査報告書—

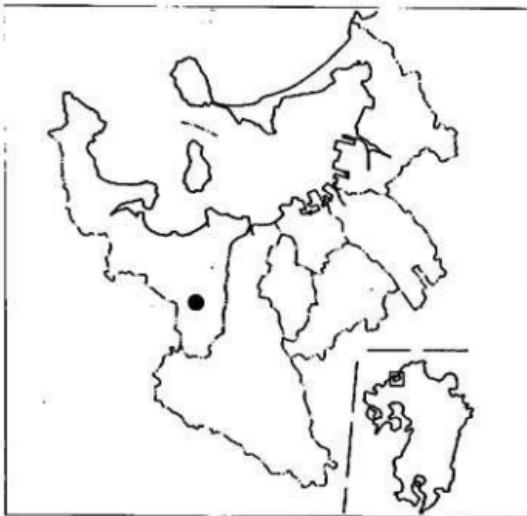
1993

福岡市教育委員会

HA NE DO
羽根戸古墳群(3)

—B群4号墳調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第346集



1993

福岡市教育委員会

序 文

本市西区の叶岳東山麓一帯は早良平野を一望のもとに見渡せる風光明媚な森林地帯であります。

近年、国道202号線バイパスの延伸に伴う道路網の整備と相まって一帯の開発・宅地化が急速に進んでおります。反面、これに伴って消滅していく遺跡も増加の一途をたどっており、これらの保護対策が大きな課題となっております。

今回の羽根戸古墳群B群4号墳の調査も民間の畠地造成に伴うものであります。調査の結果古墳群内でも古期に属する円墳である事が確認されました。

この報告書が文化財に対するご理解の一助となりますとともに学術的にも活用されれば幸いであります。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は個人による畠地の造成に伴い補助事業として行われた羽根戸古墳群B群4号墳の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は座標北である。
3. 遺構の呼称は略号化し、土壤→SKとした。
4. 本書に使用した遺構実測図は、加藤良彦・黒田和生・英豪之・溝口武司により、遺物実測図は平川敬治・加藤による。製図は木村厚子・国武真理子・加藤・黒田が行った。
5. 本書に使用した遺構写真は加藤が、遺物写真の撮影は平川が行った。
6. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
7. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
II.調査区の立地と環境.....	2
III.調査の記録.....	5
1. 調査の概要.....	5
2. B群4号墳の調査.....	6
IV.小結.....	15

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000).....	3	Fig. 18 美道封土断面(北から)	8
Fig. 2 調査区位置図(1/2,000).....	4	Fig. 19 地山整形・掘方(北から)	9
Fig. 3 調査前風景(北から).....	5	Fig. 20 地山整形・掘方(西から)	9
Fig. 4 調査前風景(西から).....	5	Fig. 21 ✕ (南から)	9
Fig. 5 現況地形測量図(1/200).....折込		Fig. 22 掘方高坏出土状況(北から)	9
Fig. 6 4号墳検出状況(北から).....	6	Fig. 23 墳丘・周溝横断土層断面(西から)	9
Fig. 7 4号墳検出状況(西から).....	6	Fig. 24 ✕ 横断土層断面(北から)....	9
Fig. 8 ✕ (北から).....	7	Fig. 25 4号墳石室実測図・土層断面図(1/60) ...折込	
Fig. 9 ✕ (南から).....	7	Fig. 26 墳丘南側土層断面(西から)	10
Fig. 10 周溝覆土土層断面(西から)	7	Fig. 27 墳丘北側土層断面(西から)	10
Fig. 11 前庭部覆土土層断面(北から)	7	Fig. 28 墓道土層断面(東から)	10
Fig. 12 石室検出状況(西から)	7	Fig. 29 SK02実測図(1/30)	10
Fig. 13 石室検出状況(北から)	7	Fig. 30 SK02土層断面(西から)	10
Fig. 14 墳丘測量図(1/200).....	8	Fig. 31 石室・封土内出土遺物(1/3, 1/4)	12
Fig. 15 石室奥壁(西から)	8	Fig. 32 覆土・表土出土遺物(1/3, 1/4)	13
Fig. 16 石室玄門(東から)	8	Fig. 33 出土遺物	14
Fig. 17 美道(西から)	8		

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は昭和63年6月9日、福岡市西区大字野方塚原1098-178他地内において地権者より畠地造成の計画にあたって福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査願いが申請された事に始まる。受付番号は教埋63-2-216である。

埋蔵文化財課では事業地内に羽根戸B古墳群4号墳が含まれる事を確認し、同63年7月18日現地踏査を実施し4号墳のほかさらに3基現存する事を確認した。このため地権者と現状での保存を巡って設計変更等が可能か協議を重ねたが4号墳のみが困難であると判断。よって本課が記録保存のため緊急発掘調査を行う事となった。

調査は昭和63年10月20日から同年11月29日まで実施された。調査面積は133m²古墳1基である。

尚、調査に際し、地権者の石川泉氏には座標点の移動等多大な御理解と御協力を賜わった。記して感謝申し上げる次第である。

調査番号	8837	遺跡略号	HDK-B
調査地地籍	西区大字野方塚原1098-178他	分布地図番号	105-B-7
開発面積	3,000m ²	調査実施面積	133m ²
調査期間	88. 10. 20~88. 11. 29	事前審査番号	63-2-216

2. 調査の組織

調査委託：石川泉

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（当時）

調査統括：埋蔵文化財課長 柳田純孝（当時） 埋蔵文化財課第2係長 飛高憲雄（当時）

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 松延好文（当時）

調査担当：埋蔵文化財課第2係 山崎龍雄 加藤良彦

調査協力：溝口武司 黒田和生 英豪之 浜地富男 藤崎久子 若狭睦代 藤タケ 米嶋ハツ
ネ 脇坂レイコ

資料整理：平川敬治（九州大学） 黒田和生 木村厚子 能美須賀子 国武真理子 齋田慧

II. 調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ5km、博多湾岸より南へ4kmの地点、室見川が貫流する早良平野と高祖山麓・瑞梅寺川に限られた今宿平野とを東西に分かつ、背振山系から飯盛山・叶岳・長垂山へつななる山塊から、早良平野へいくつも延びる支丘の一つの先端部、標高75mの北側斜面に位置し谷間から早良平野・博多湾を眺望できる。行政的には福岡市西区野方塚原に所在する。旧状は山林である。

周辺の歴史環境を概観してみると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地に点在しており、羽根戸原遺跡・吉武遺跡群・有田遺跡群でナイフ型石器・細石器が、羽根戸遺跡・広石遺跡群・名切谷遺跡・笠置谷古墳群で土壙・集石炉・押型文・条痕文・撲糸文土器・石槍・石鏃が検出されている。前期は沖積地の微高地まで進出し、四箇遺跡群・湯納遺跡・田村遺跡で轟B式土器・曾畠式土器・堅穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基、有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基、四箇遺跡群で埋甕・堅穴・堅穴住居址・特殊泥炭層（堅果類果皮の多量堆積—ヒヨウタン・リョクトウ出土）が出土。晚期では突帯文の時期に増大し、有田七田前・十郎川・拾六町ツイジ・四箇・四箇東・田村遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具木製品・矢板列・埋甕・堅穴住居址等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く、有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。中流域の岩本遺跡では水田を検出した。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武遺跡群では多数の青銅器を副葬した木棺・妻棺墓群が検出。中期にはさらに面的な広がりを見せ、内陸奥部にまで及ぶ。吉武遺跡群は拠点として更に発展し妻棺墓は1000基以上・墳丘墓・大形の4×5間掘立柱建物も検出された。またこれに次ぐ集団として東入部遺跡群で妻棺130基中より細形銅劍1・銅鏡10・素環頭刀子1・鉄矛1・鉄刀1・鐵劍1・鍔1を検出している。

弥生終末から古墳時代前期にかけては野方中原・野方塚原・野方勧進原・野方柳原・飯盛谷・広石遺跡群・宮ノ前C地点・重留・五島山・藤崎・西新町・有田遺跡で石棺墓・方形圓済墓・墳丘墓・住居址等が検出され、後漢鏡・三角縁鏡などが出土している。中期では吉武で円墳20数基・帆立貝式墳（樋渡古墳）・方墳（樋渡2号墳）・掘立柱建物・住居址多数が検出され、重留では70m級の前方後円墳（坪塚一重留1号墳）・方墳（重留2号墳）があり、梅林では27mの小型の前方後円墳を検出している。6世紀前半～中頃にかけ山麓部の羽根戸・羽根戸南古墳群で群集墳の造営が始まり、今調査分はこの最初期に属する。6世紀の後半以降金武・野方・広石・コノリ・高崎古墳群等金武から長垂山麓にかけにわかに増大する。鉄滓供獻が見受けられるのも共通する。広石遺跡群ではこの時期から7世紀代にかけ桁行4間以上の掘立柱9棟を含む26棟・堅穴住居址43戸の集落を検出している。



1. 羽根戸古墳群 2. 羽根戸遺跡 3. 吉武遺跡群 4. 有田遺跡 5. 四箇遺跡群 6. 温納遺跡
 7. 田村遺跡群 8. 拾六町ツイジ遺跡 9. 藤原遺跡 10. 野方中原遺跡 12. 野方塙原遺跡
 13. 野方柳原遺跡 14. 飯盛谷遺跡 15. 宮の前C地点 16. 重留遺跡群 17. 拝(灰)塚古墳 18. 五島山古墳
 19. 西新町遺跡 20. 羽根戸南古墳群 21. 岩本遺跡 22. 金武古墳群 23. 野方古墳群 24. 広石古墳群 25. 城の原房寺
 26. 石丸・古川遺跡 27. 下山門敷町遺跡 28. 車多田遺跡 29. 斜ヶ浦瓦窯跡 30. コノリ古墳群 31. 高岡古墳群
 33. 笠間谷古墳群 34. 梅林古墳 35. 東入部遺跡

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)



Fig. 2 調査区位置図 (1/2,000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

羽根戸古墳群は野方川が貫流する大きな谷の南東部、飯盛山塊から北東に延び細かく開析された山麓と舌状の丘陵上に分布しており、A～Pの16支群に分けられる。B群はこれらのうち上位の谷部の南斜面を主に分布している。昭和43年度からの遺跡分布調査時には4基の古墳が確認されていたが、今回の踏査で4号墳の北側丘陵の谷に面した斜面でさらに3基確認されている（5～7号墳。このうち5号墳は90年度に調査が行われている。Fig. 2・5）。1～3号墳と4～7号墳は60～100m程離れており、4～7号墳はこれらと別個の群集と解した方が妥当と思われる。4号墳は丘陵先端部の北側斜面に立地、地山整形を行い谷部を造成して墳丘を構築している。墳径8.0mの横穴式石室を有する円墳で、丘陵稜線側に地山整形を行い、幅1.5mの溝を巡らす。石室は5～7号墳が谷側に開口しているのに対し本古墳のみ西側の谷頭方向に開口しており、これに連なって延長方向に墓道が延びている。

石室は両袖单室で $3.4 \times 1.6\text{ m}$ を測り、玄室は平面羽子板形で、羨道は逆に $0.9 \sim 1.1\text{ m}$ と開き、閉塞は方形の一枚岩でなされる古い形態を示している。

遺物は石室内と墳丘内、覆土中からⅡ～Ⅲ A期の須恵器と土師器・刀子・鐵と鉄器を3点検出している。

他に丘陵稜線側の馬蹄形溝内で焼土墳を1基検出している。

註)「羽根戸古墳群(4)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1993年



Fig. 3 調査前風景(北から)



Fig. 4 調査前風景(西から)

2. B群4号墳の調査

東へ延びる小丘陵の幅6m前後の先端部付近に位置する。丘陵の北・東・西側は小河川の開析によって3~5m程の段崖となっており、4号墳はこの丘陵の北向き斜面に地山整形を行い構築されている。現況は山林で、墳丘は頂部が削平され天井石が持ち去られてはいるが、比較的遺存状態は良く径13m程の丘陵尾根側の地山整形も肉眼で観察できる。見かけの墳径で7m比高約2mの円墳である(Fig. 3・4・5)。石室部分は天井石が全て撤去され、玄室左側壁も抜き取られ腰石を残すのみで、内部には破壊時の残土と崩落した石材、落葉が厚く堆積していた。

調査は開口している石室内の清掃と周辺の現況地形測量から開始し、石室の十字方向に土層観察ベルトを設定し、これを残しながら二次堆積層の除去、墳丘の検出(Fig. 6~9・14)、墳丘封土の除去と進めた。最終的には地山整形面・石室掘方の検出掘削を行い完掘した。墳丘及び溝を覆う二次堆積層は表土下、暗黄灰褐色土・黒灰色土・暗黄灰色土と続き、溝の最深部で80cmに達していた(Fig. 10・11)。

石室(Fig. 12・13・15~18・25)

石室は単室両袖型の横穴式石室で、主軸をN-79°Wにとり西の谷頭側に開口する。玄室は奥壁側で1.68m、玄門側で1.3m・右側壁2m・左側壁2.16mの羽子板形を呈するプランで、玄門部は右袖幅32cm・左袖幅50cmである。床面は8~25cm程の亜角砾で敷石がなされていたと思われるが攪乱ではなくどが現況を留めていない。羨道部は羨門側で幅1.05m・玄門側で幅0.9mと玄室の平面プランとは逆に開いている。長さ1mで、玄門部に細長い砾を2段に積んで樋石としている。床面は下段の砾の中位に有り、玄室床面はこれの下面にそろっており15cmの段差となっている。閉塞はこの外側に



Fig. 6 4号墳検出状況(北から)



Fig. 7 4号墳検出状況(西から)

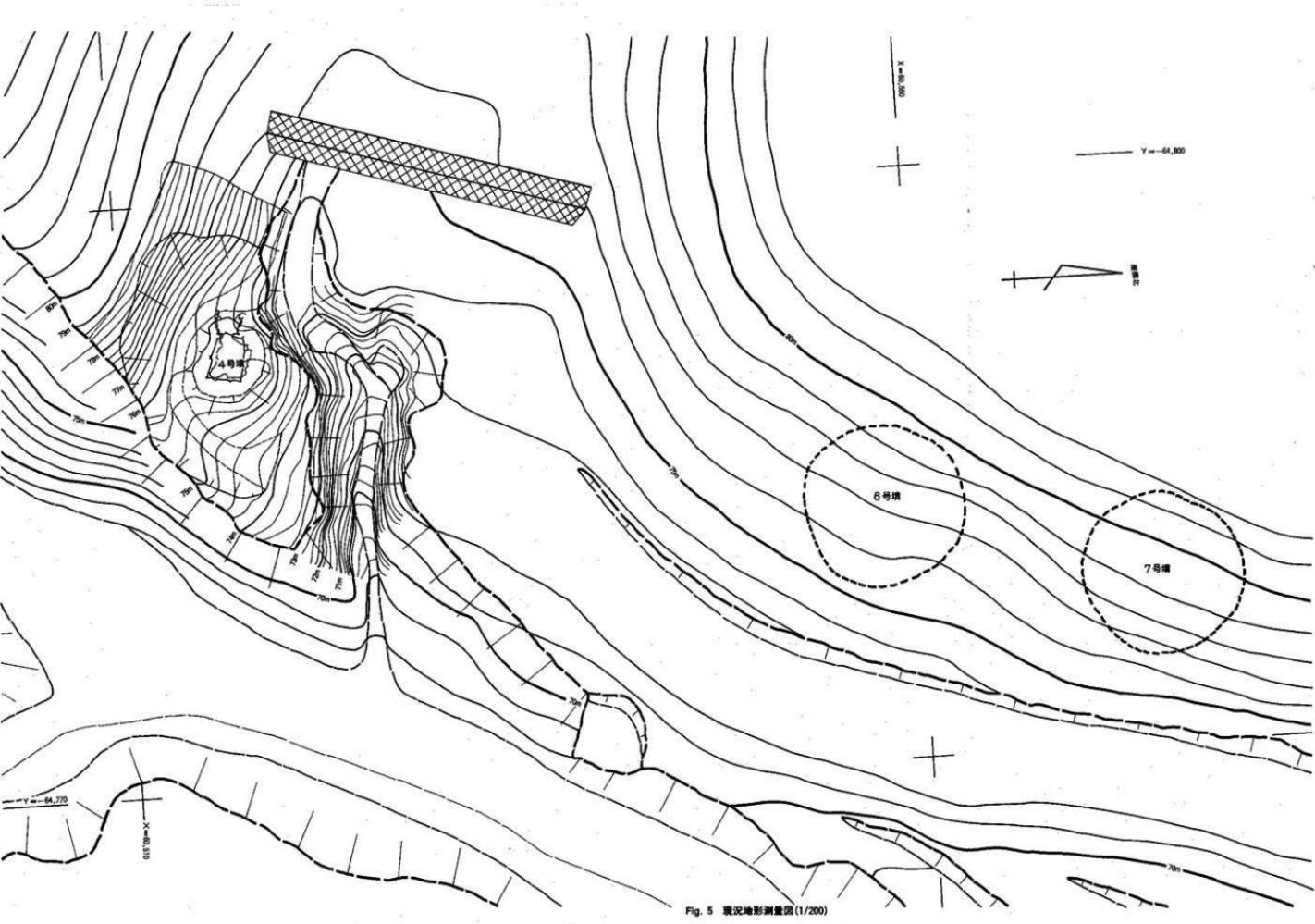


Fig. 5 现况地形测量图(1/200)



Fig. 8 4号墳検出状況(北から)



Fig. 9 4号墳検出状況(南から)



Fig. 10 周溝覆土土層断面(西から)



Fig. 11 前庭部覆土土層断面(北から)



Fig. 12 石室検出状況(西から)



Fig. 13 石室検出状況(北から)

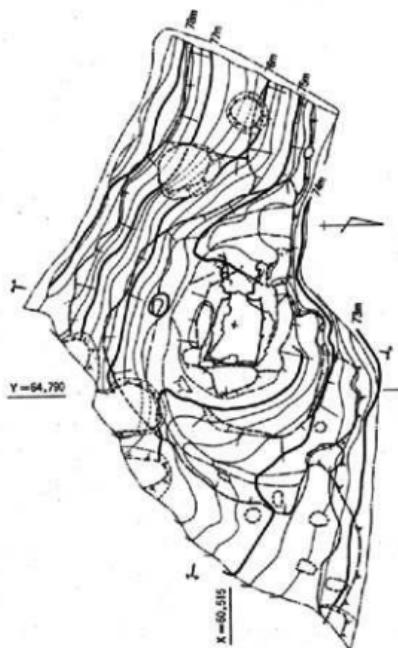


Fig. 14 墳丘測量図(1/200)



Fig. 15 石室奥壁(西から)



Fig. 16 石室玄門(東から)



Fig. 17 横道(西から)



Fig. 18 漢道封土断面(北から)

幅60cm・高さ80cm、厚さ25cmの方形の一枚岩でなされる。奥壁は幅50~75・高さ45cm・厚さ20cm程の3個の扁平な腰石の上に幅30~40×20cm程の小振りの塊石を持ち送り気味に積み上げ目を横に通している。左袖石は90×50cm厚さ20cmの扁平な石を継ぎ位に、右袖石は同様に扁平な石を2石継ぎ位に積み、さらに塊石を1~2石積んで漢道側壁と一体化させ、この上に棺石を架構し



Fig. 19 地山整形・掘方(北から)



Fig. 20 地山整形・掘方(西から)



Fig. 21 地山整形・掘方(南から)

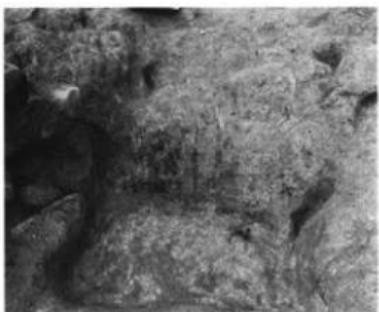


Fig. 22 掘方高环出土状況(北から)



Fig. 23 塹丘・周溝横断土層断面(西から)



Fig. 24 塹丘・周溝縦断土層断面(北から)



Fig. 26 塙丘南側土層断面(西から)



Fig. 27 塙丘北側土層断面(西から)

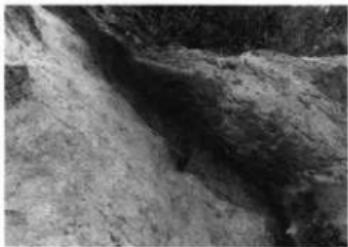


Fig. 28 基道土層断面(東から)

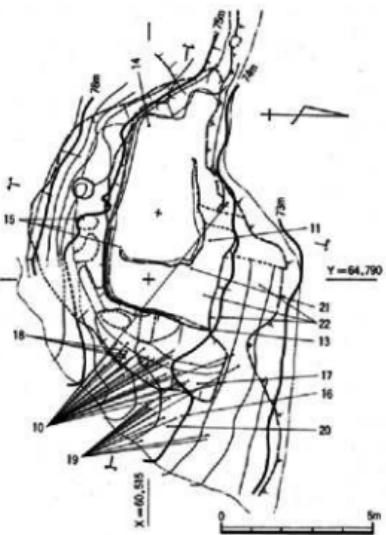


Fig. 29 地山整形面測量図(1/200)

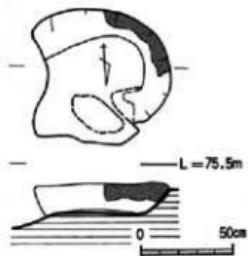


Fig. 30 SK02実測図(1/30)

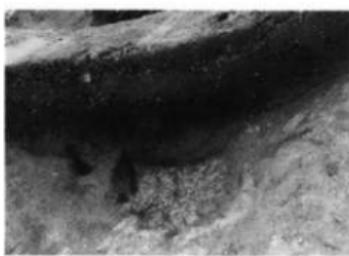
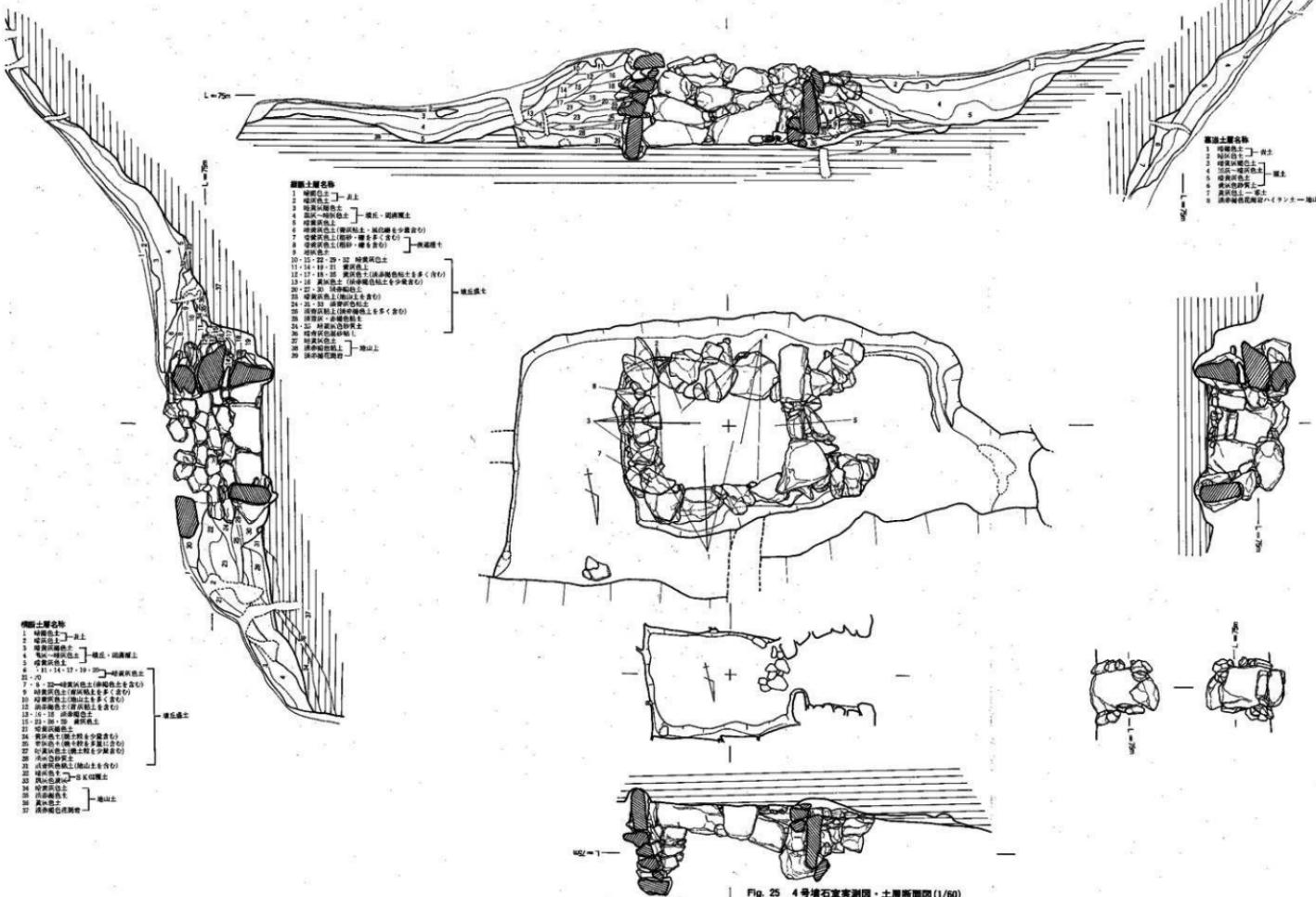


Fig. 31 SK02土層断面(西から)



たものと思われる。奥壁の残存高は袖石高より15cm高く、玄室天井石は袖石上に架構するものと思われる。側壁も奥壁と同様に扁平な石を横位に立てて腰石としている。

地山整形 (Fig. 19~22・29)

古墳は丘陵の急斜面と緩斜面との地形変換線近くに位置するため、尾根側を東西13m・南北8mの馬蹄形に緩斜面を広げる様に削り出して基底面をつくり、さらにこれの下端に接して幅2~2.5mの馬蹄形溝を掘削する。深さは浅く基底面から20~40cm程の掘り下げで断面は浅いU字形を呈している。溝底は緩斜面に沿って南から北に傾斜している。さらにこの内側に石室構築の水平面を確保するため東西8.5m・南北3.8mの、石室プランを拡大した矩形に60cm掘り下げ、残土を北の谷斜面に押し出し整地している (Fig. 25 墳丘横断面～端)。

掘方・墓道 (Fig. 19~22・25・28)

掘方は2段目の整地面中央に、腰石部分のみ「コ」の字状に東西4m・南北2.7m・幅50cm・深さ25cm程掘り下げている。

墓道は馬蹄形溝の西端に接して、石室の長軸方向の谷頭に向かって幅80cm・尾根側に高さ40cm程掘り込み残土は谷側に整地したと思われるが流失している。

墳丘 (Fig. 6・7・14・23~27)

墳丘の盛土は馬蹄形溝の中央から行っており、地山整形のラインとは一致しない。地山整形で露出した花崗岩塊乱層及び上層の暗黄灰色土上からなされている。墳径は東西方向で8m・溝外径で11mを測る。墳丘残存高は石室床面から1.3mである。2段目の地山整形面にかかる土層は薄く幅が狭く、この層群の外側に厚くしまりのない広い土層が広がる。前者は青灰色粘土を混じた固い土と地山土との互層で、掘方と石室壁石間の裏込め・被覆の盛土で、後者は天井石被覆と墳丘整形の盛土と考えられる。

遺物出土状況 (Fig. 9・25・29)

遺物は石室内・封土内・二次堆積土（覆土）中から検出されている。

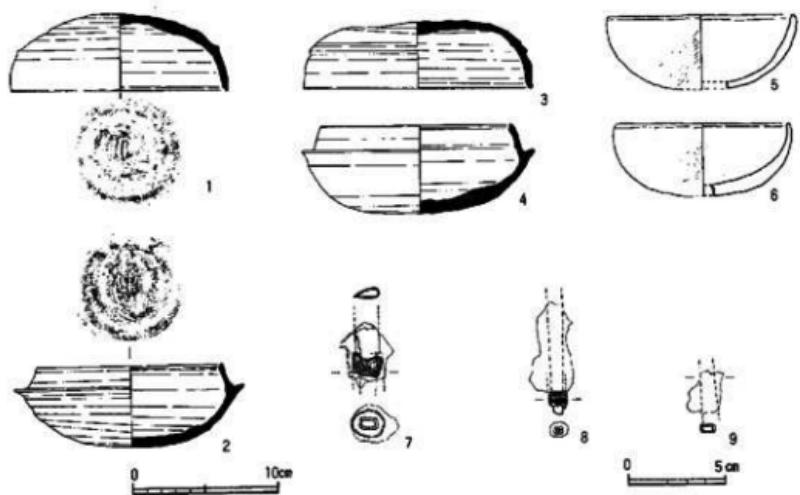
石室内は徹底した攪乱が行われており残土中から検出されるものがほとんどで原位置を保つものはない。掘方埋土中からは少量検出しており集中しない。羨道脇の高坏 (Fig. 32-14) はほぼ完形で床面より検出。覆土中からは墳丘東側の上段の整形面上と溝内に流れ込んだ状態で須恵器と土師器の甕を破碎状態で検出。祭祀跡と思われる。

焼土壙 SK02 (Fig. 30・31)

墳丘南側、溝底の最高所で検出した。74×70cm・深さ16cmで周壁が赤変し、床面に黒灰色の炭灰が7cm程堆積する。北側の壁が封土を切っており、墳丘覆土の最下層土が流れ込んでおり明らかに古墳に伴うもので、天井石架構時以降に掘削使用されている。

出土遺物 (Fig. 32~34)

1~9は石室内攪乱土からの出土、11・13・14は石室地山整形部の埋土内出土、12は墓道か



石室

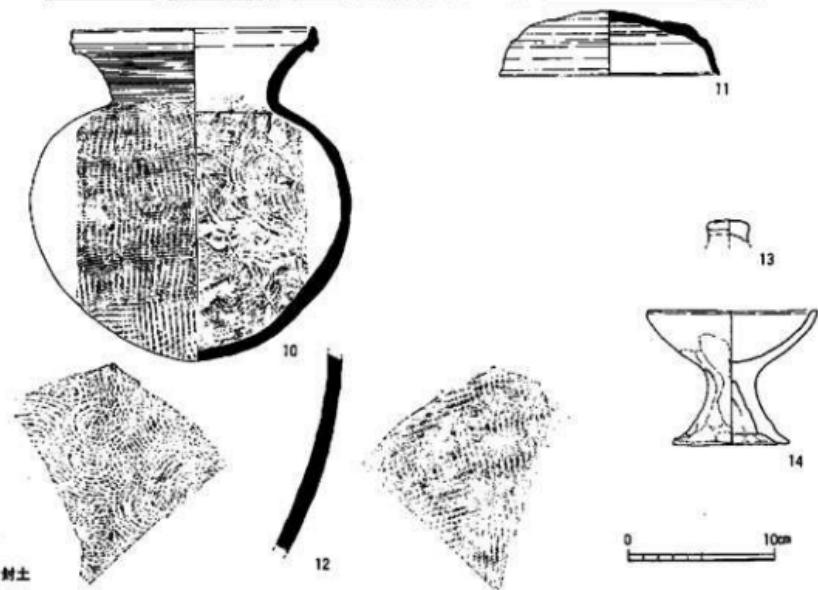


Fig. 32 石室・封土内出土遺物(1/3, 1/4)

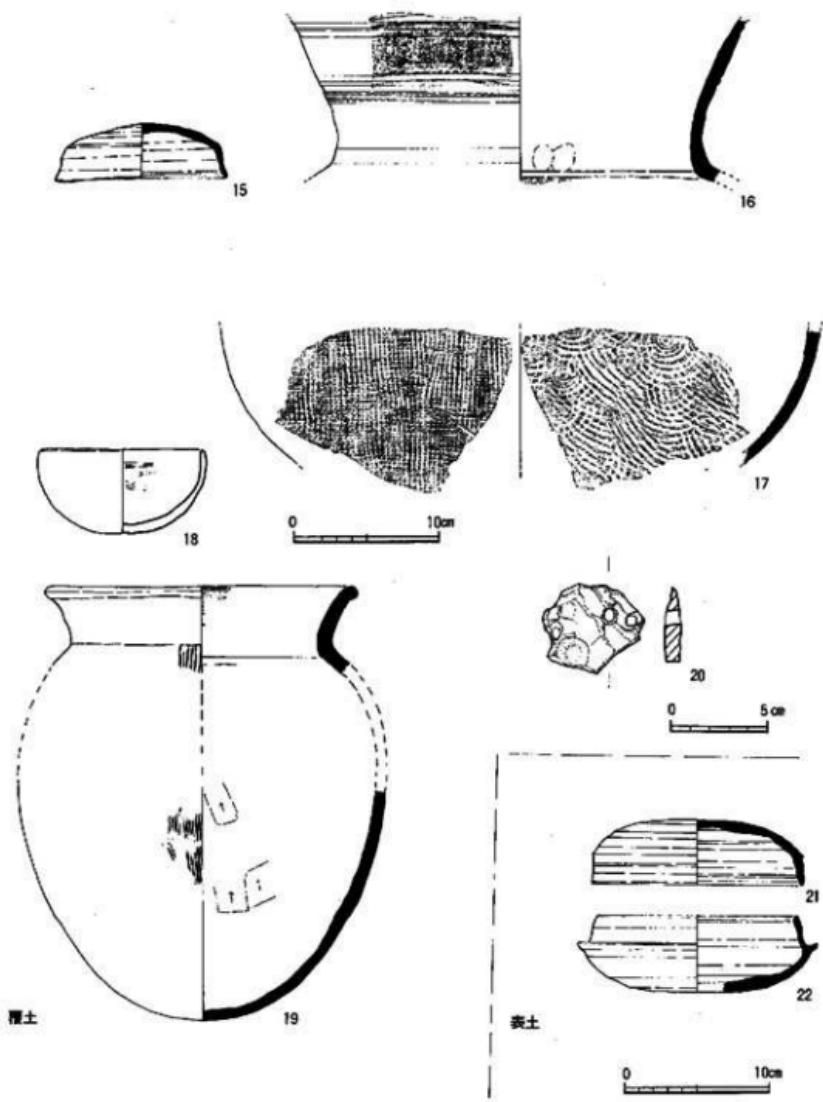


Fig. 33 覆土・表土出土遺物(1/3, 1/4)

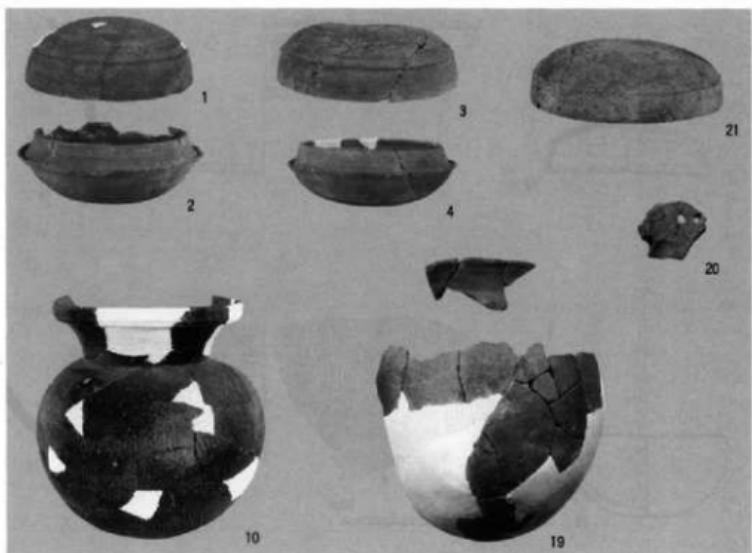


Fig. 34 出土遺物

ら、10・15~20は地山整形面・溝覆土から、21・22は表土からの出土である。文中で特にことわらないかぎりは須恵器を示している。

1・2は蓋坏で対と思われる。1は口径14.8cm器高5.6cm、天井から体部の1/2までは右回転のヘラケズリ。屈曲部は棱線化し、口唇内面は浅い段となっている。2は口径12.8cm、体部の1/2が右回転のヘラケズリ、立ち上がりは高く口唇内面に沈線を施す。蓋身とともに内底部に平行弧線の當て具痕が残る。3は坏蓋で口径15.6cm、屈曲部は突窓の痕跡をとどめている。4は坏身で口径13.3cm・器高6.1cmで深い。回転ケズリは体部の1/2程。5は土師器坏で口径13cm。外面にハケ調整が残る。6も同じく土師器坏で口径12.2cm。外面はヨコハケ後ナデる。7~9は鉄器で、7は刀子の中茎部分。径1.7cmの木柄が残る。刃幅1.2cm。8・9は長頸鎌の頸部で、8は桜皮を巻いている。11は坏蓋で口径15cm。屈曲部は凹線のみで、体部の1/2が回転ヘラケズリで灰をかぶる。12は大甕の胴部片で外面は木目直交の平行叩後ヨコカキ目調整。内面には同心円の當て具痕が残る。13は土師器の蓋のつまみ部分と思われる。径2.8cm。ナデ調整。14は羨道右側裏の地山整形部床面から出土した土師器高坏ではば完形(Fig. 22)。口径11.5・器高9.3cm。脚を体部に接合後縱方向のヘラケズリを施し、右回転でねじっている。10は小形の甕で、一片のみが封土内からの出土で他は墳丘東側(奥壁側)の地山整形面と溝内に流れ込んだ。

だ状態で19の土師器壺と並んで破碎状態で検出されており、墳丘整形前に行われた祭祀に伴うものと考えられる。口径17cm器高22.8cmで外面頸部は平行叩後細かなカキ口調整、胴部は同じく木目直交の平行叩後粗いヨコカキ目を施す。内面には同心円の当て具痕が残る。15は壺蓋で口径11.6cm。口縁が若干外反する。16は大壺の頸部で径26.4cm。外面の沈線間に細かな波状文を施す。17は大壺の胴部。18は土師器壺で口径11.6cm器高5.8cm。内面はヨコハケ後ナデ消す。体部が深い。19は土師器壺で10の須恵器壺の北隣で破碎されて検出された。口径21.6cm。復原器高30cm。口唇は玉縁状になる。胴部外面はタテハケ、内面はタテケズリ調整。20は細粒砂岩片の壺状石で全長7.2cm。厚さ1cmで2穴貫通している。21・22は壺壺で石室脇の表土出土。機乱時に石室内からかき出されたものであろう。21で口径14.6cm、22で14cmを測る。

IV. 小 結

1) 4号墳は墳丘径8.0m、残存の埴高1.3mの円墳で、主軸をN-79°-Wにとり西の谷頭方向に開口する単室両袖型の横穴式石室を主体とする。玄室は幅1.68~1.3m長さ2mの羽子板形の平面プランで、羨道は長さ1mと短く、幅0.9~1.05mで玄室とは逆に「ハ」の字形に開く。四壁の腰石は横長で扁平な小振りのものを立てて用い、さらに小振りの塊石を持ち送って壁を構築している。また石室の長軸の線上で直線的に延びる、斜面に削り込んだ墓道を検出した。祭祀は周溝内の焼土壙1基と奥壁裏側の周溝外側地山整形面で須恵器・土師器各一個体の破碎状態の壺を検出した。壺の一部は封土内に紛れており、墳丘整形前の祭祀と考えられる。

出土遺物は主に石室内からで、著しい盗掘のため副葬品の全容は明らかでないがⅡ~ⅢA期の須恵器を検出しており、最低一度の追葬が考えられる。

2) 4号墳はB群の4~7号墳の群集中最古の古墳である。類例はN群4号墳と羽根戸南古墳群E4号墳が付近で有る。谷頭に開口する石室で小振りの腰石を用い、羽子板形の平面プランと似く「ハ」の字形に開く羨道と、堅穴系横口石室の特徴を強く遺存しており、6世紀前半の須恵器を供伴する等羽根戸古墳群中古期の特徴を示すものと思われる。

羽根戸古墳群 (3)

— B群 4号墳調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第346集

1993年（平成5年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

